

法の水茎

大正大学講師 高橋 秀城

(80)

立春を迎えて、木々の梢も緩やかに芽吹いてきました。庭先の寒紅梅も日に日に蕾が綻んで、いち早く春の訪れを告げています。立春は、一年の季節を二十四に分けた二十四節気の始まりです。まだまだ「春は名のみ風の寒さや」（早春賦）といった感もありますが、これからあちらこちらで早春の息吹が感じられるようになってくるのでしよう。

年のうちに
春は来にけり
一年を
去年とや言はむ
今年とや言はむ

（古今集「在原元方」）
（まだ十二月中なの立春を迎えたよ。この一年を去年と呼べばいいの、それとも今年と呼べばいいのだろうか）

「十二月中に立春」と言われても、現代の私たちには違和感があるかもしれないませんが、この「古今集」の冒頭を飾る和歌は「年内立春」を詠ったものです。年内立春とは「陰暦で、新年を迎えないうちに立春が来ること」で、例えば、今年の立春（二月四日）は、旧暦では十二月三十日の大晦日に当たる年内立春となりまして、こうした巡り合わせは、曆に敏感だった昔の人々にとっても、不思議な感覚だったのでしよう。

ちなみに、立春と旧暦一月一日が重なる年を「朔日立春」と呼びます。これは約三十年に一度巡ってくるので、次はまだまだ先の二〇三八年になると予想されています。

年のうちに
晴は来にけり
直垂を
去年のをや着む
今年のをや着む

（頼瑛「真俗雑記」）
（年内に来てしまった晴の儀式には、去年の直垂を着ようか、今年新調したのを着ようか）
何やら先ほどの「古今集」の歌と似ていますが、これは鎌倉時代の真言宗の僧侶が作ったものです。「古今集」の歌の第二句「春」を「晴」、第三句「一年」を「直垂」、第五句「去年とや言はむ今年とや言はむ」を「去年のをや着む今年のをや着む」と語句を変え、ことごとく新しい衣服（直垂）に着替えようかと面白く詠っています。「古今集」の「去年とや言はむ今年とや言はむ」といった言い回しは、僧侶には論議（修行中の問答）のように聞こえていたようです（『沙石集』巻五）。良く知られた歌の作り替えを通じて、楽しみながら和歌の



立春を迎え、梅の花が咲き始める

勉強をしていたのでしよう。そしてそれは、日々の仏道修行とも結び付いていたのだと思います。旧暦二月十五日は、お釈迦様が入滅（仏が亡くなること）された日です。全国の寺々では「涅槃会」

「常楽会」「如月の別れ」などと呼ばれる法要が執り行われ、お釈迦様の入滅を嘆き悲しむ姿を描いた「仏涅槃図」を堂内に掲げて、その恩徳を偲びます。お釈迦様の入滅の様子

平成最後の後七日御修法

一月八日〜十四日

瑞雲たなびく京都・東寺灌頂院において、平成最後の後七日御修法が一月八日より十四日まで七日間執り行われた。

御修法は開祖・弘法大師が八三五年に宮中で始められ、現在では東寺に移し、真言宗最高の儀式と言われ、真言宗各派の総本山・大本山から御山主（管長）や、選ばれた高僧の方によって国家安泰、五穀豊穰、世界平和を祈念される。

今回、大阿闍梨を真言宗豊山派・総本山長谷寺（奈良）田代弘興大僧正現下が務め、息災護摩壇、増益護摩壇、五大尊壇、十二天壇、聖天壇、神供壇を設け各配役が修法



真言宗各派の高僧達が集う

され、高尾山法類寺院の放光寺長老（山梨）清雲俊元大僧正が、鬼神を供養して擁護を願う神供を担った。平成最後の年であり、元号があらたまる慶びの年でもあり、治道には大勢の参詣者が、朱傘を差しかけられた高僧たちに手を合わせていた。

を伝える話の中には、次のような「父子の別れ」を語るものが見られます。今は昔、お釈迦様が亡くなられようとする時、一人息子の羅睺羅は、「父が亡くなるのを見るのは悲しい」と、余所の場所に行ってしまうが、羅睺羅に言いました。「そなたの父が亡くなるうとされていくのか、なぜ付き添わないのか。父は、そなたを待っているのだ。すぐに帰って臨終に立ち会いなさい」と。羅睺羅はその教えに従い、辛さを堪えて戻ったのでした。

帰ると、お釈迦様の御弟子たちが「お釈迦様のお側に急いで参りなさい」と勧めます。泣く泣く近づいていくと、父であるお釈迦様は羅睺羅をご覧になり、「私は今、涅槃に入る（入滅する）。私の姿を見るのは最後である。早く近くに來なさい」と仰せられます。涙ながらに駆け寄ると、仏

は羅睺羅の手をお取りになつて仰いました。「羅睺羅よ、そなたは私の子である。十方世界（あらゆる世界）の仏たちよ、この子に慈愛（人を慈しむ気持ち）を与えてください」と。こう願われて入滅されたのでした。これが、お釈迦様の最期の言葉です。『今昔物語集』

お釈迦様の入滅の様子は、多くのお経に説かれていますが、莊嚴な様を描くそれらとは違い、この話では、お釈迦様の人間味が溢れています。『今昔物語集』は、「お釈迦様でさえ我が子の行く末を思い悩むことを、私たちに示されたのであろう」と結んでいます。誰しも共感できるこうした話は、多くの人々の胸を強く打ったことでしょう。

親子の別れは、辛いものです。ただ、「釈尊をば能忍とも名づけ奉る。羅睺羅尊者は忍辱第一なり」（お釈迦様を「よく忍ぶ」という意味の「能忍」と申し上げる。そしてその子羅睺羅尊者は忍辱第一の人であった）と語られているように（『十訓抄』）、これまで「忍」と「慈しみ」（慈悲）の生活によって、去りゆく者も、送り残る者も、ともに終の別れを乗り越えられたのではないかと考えます。

世の中の
常なきことの
たましとて
空隠れにし
月にぞありける

（建礼門院 右京大夫集）
（世の中の無常を説こうとして、月が一時隠れるように、お釈迦様は入滅されたのです）
門渡る月の満ち欠けは、この世の「無常」（儚さ）を示しています。そこに住まう鬼のように、私も「慈忍の心」（慈悲をもつて、苦難に堪え忍ぶ心）を胸に刻みたいと思えます。

（栃木北部教区普濟寺）